

全校のみなさん、おはようございます。

いよいよ十二月に入り、二〇二四年の終わりも見えてきました。また、二学期の期末考査も終わりました。どのような結果であれ、それを次の学年末試験に繋げていきたいものです。

さて、勉強していく中で「どうして勉強しなければならないのか」という思いが湧き出てくることがないでしょうか。苦手な教科に関して、特にそう思うかもしれません。しかも、伊那西高校には仏教の授業があり、テストも行われています。「大学の入試には関係ない教科なのに、なぜ勉強しなければならないのか」と思ったことがある人も少なからずいるのではないのでしょうか。

これについて、今月の伝導掲示板の言葉から考えてみたいと思います。イギリスの初代ウェリントン侯爵であるアーサー・ウェルズリーは「宗教なき教育は賢き悪魔をつくる」と言いました。

ところで、仏教では出家の際に「剃髪」といって髪を剃り落とすことを慣わしとしていますが、現在でも、浄土真宗では剃刀を髪に三回当てる、という儀式を行っています。なぜ三回なのかというと、「三つの髻（もとどり）を落とすため」であると言われていています。髻とは髪を束ねた結び目のことで、人間の煩惱を表わしています。その三つの髻というのは「名聞」「利養」「勝他」という三つの煩惱のことです。

「名聞」とは、世間から認められたい、褒められたいという他者からの評価に執着する心です。「利養」は、金儲けがしたい、損すること許せず得することだけやりたいという損得に執着する心です。そして「勝他」は、他者より優位な立場にありたい、つまり勝ち負けに執着する心です。また、これらの三つに共通して、自分の都合を通すために人を傷つけたり蹴落したりすることも辞さない、むしろ正しいことである、という自分を正当化しようとする心も隠れています。

このような心を離れようとするところに仏教の願いがあります。そして、仏教を建学の精神とする伊那西高校での勉強は、どの教科もこの願いが土台にあると言えます。しかし、世間的には、試験や実生活の役に立つかどうか、どれだけ得できるかどうか、偏差値の高い学校に入って世間で優位に立つことができるかどうか、ということのため勉強や学校があるように考える風潮が強くなっているように思います。そのような勉強はむしろ、この「三つの髻」を離れるどころか、それらを助長して自分の都合のために動く「賢き悪魔」をつくっていくようなものだと言えないでしょうか。